
ゴーレムマイスター

駄目春水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴーレムマイスター」

【Zコード】

Z6941Y

【作者名】

駿田春水

【あらすじ】

駿目な兄と優秀な弟が士機兵ゴーレムに出会った事がきっかけで異世界へと飛ばされる。その世界は自分達がいた世界とよく似た多元世界だった。しかし、魔科学まかがくが発達したその世界には魔法練成なる技術が存在した。兄弟は元の世界に帰る事ができるのだろうか？そして何故召喚されたのだろうか？「ミカルな風味を醸し出しつつもシリアルに描く多元世界転生の魔法ファンタジーです。

プロローグ（前書き）

この物語は日本の現在を舞台しておりますが、すべてフィクションであり、人物及び団体、地名などには一切関係はありません。

プロローグ

「兄さん、右腕の動きが変だ。魔力はしつかり供給されてる？」

「……んな事言つたつて、うわつ。」

土と金属を混ぜた様な不思議な材質で作られた操縦席。

中央には水晶玉みたいな大きな紫色の玉。

尻が座面から飛び上がるほどの縦揺れの中、俺はその玉にしがみ付
き、訳も分からず強く念じる様に力を込める。

紫の光がその光を増していき、その丁度真上に表示されるモニター
に映される人型の映像に光が染み渡つていき、暗かつた右腕部分も
光を帯びた。

「……な、何とかいけそうだ、おらあ！ 跳べえ！」

内臓が浮き上がるみたいな感覚に少々の吐き気を催す。

操縦席左右壁面と正面にあるモニターの奥壁面から見える外の風景
が上下したかと思えば、広大な景色が眼下に広がる。

内臓が暴れまわつたせいなのか、興奮しているせいなのかわからな
いが、胸が煩い位に高鳴つている。

「兄さん、前！ 前、前！」

激しい衝撃と共に、更に激しく揺さぶられた内臓と脳。

目の前の広大な景色は一瞬にして星空に変わる。

奇妙な操縦席から引きずり出され、今だ焦点の定まらぬ俺の視界に
ぼんやりと映るのは俺を心配そうに見つめる我が可愛い弟。

「兄さん、大丈夫？ 怪我はない？」

「お、おう。死んだ婆ちゃんにちょいとばかし会つて来ただけだ。」

「お婆ちゃんは死んでないでしょ。 それより、すごいね、この

……」

弟が俺と共に巨木へと激突したソレを見つめる。

操縦席と同じく、土で出来ているのか、金属で出来ているのか、不^ふ明瞭な巨体。

かなりの高さから猛スピードで落下し、巨木に激突したにも拘らず、操縦者共々無傷なのは脅威的と言えた。

「 これが、俺の……士機兵。 」

山道を走るバスの中。

二時間に一本という信じられない程に怠慢なバスを寸での所で乗り逃し、二時間待つてやつて来たバスにやつと乗つた俺と弟は祖母の家へと向かう道中だつた。

事故で両親を亡くした俺達は唯一の身寄りである祖母に面倒を見てもらひ事になつてゐる。

祖母は偏屈な変わり者で人里離れた山の中に住んでいた。

祖母には一度として会つた事はないが、高校二年の俺と、今年中学を卒業したばかりの弟では一人で生活するには思い切りが必要で、思い切りの足りない俺は祖母を頼る事に決めた。

俺と違ひ素直な弟は、俺の決断に異を唱える事なんて滅多にない。けれど、嫌な顔一つせず、俺に従う弟を見ていると少し胸が痛んだ。

俺と正反対で優秀な弟は有名私立に特待生枠に入る予定だつた。

最初は俺も「お前は折角いい高校に受かつたんだから、こっちに残つた方がいい。向こうでバイトすればお前一人の生活費くらいはなんとか捻出してやるよ。」なんて兄貴らしい事も言つてみたものだが、流石に非の打ち所のない弟は「兄さんと一緒に高校はどこだつて構わないよ。僕がいたい場所はいい高校なんて所じやなくて、

兄さんと一緒にいられる所だから。」なんて、もしも妹であればうつかり一線を越えてしまいそうな殊勝な発言をした。

そんな訳で俺は珍しく発揮した兄貴らしさをあつさりと引っ込めて弟を連れて行く事にした。

終電まで走破したオンボロバスを降りると、年に2、3人は遭難者が出ていそうな森の中。

携帯を開けば当然の様に圏外。

時折目の前を横切る虫は拳ほどではなかつたにせよ、都会育ちの俺の目にはそのくらいの大きさに映つた。

「一応、婆ちゃんの手紙には地図が載つていたんだが……」と言つて、弟に差し出す。

その手紙を見て、弟の顔が青褪めていくのが分かる。

かなり大雑把おおざっぱに描かれた地図だとは思つたが、物事をあまり深く考えない俺は着けばその地図で分かるものなのだろうと安易に考えていた。

それがそもそも間違いで田の前に広がるのは土と木だけで方角すら分からぬ。

地図に描いてあるのは俺たちのいるバス亭と大きな木、そして『この辺』と書いて矢印の引いてある民家と思わしき絵。

目に付く木はすべて樹齢何年か、というくらいの巨木ばかりでどれが祖母の言いたい大きな木なのかさっぱり分からぬ。

「と、兎に角歩こう。」

「兎に角歩いちやつたら、絶対遭難しちゃうよー。最もな言い分だ。

「何だか喉が渴いたからアイスが食べたいよな。」

俺達はそのままバス亭のベンチに座り込んでいた。

弟は俺の言葉を無視したまま、何とか解読しようとしているのか祖母の茶目つ氣溢れる地図を睨み付けている。

「俺達、このまま死んじゃうのかな？」

「兄さん、ちょっと黙つてよ。それにここから動かなければ、最悪引き返す事もできるでしょ？」

「まあな……しかし、ここで一泊はしなけりゃいかんけどな。」「へ？」

優秀な弟には珍しく素^す頓狂^{とんきょう}な声を上げる。

地図の解読に夢中になつていたせいか、時刻表を見ていなかつたのだろう。

俺はする事もなく、時刻表を眺めていたから知つている。さつき俺達が降りたバスが本日最後の一^か本だつた事を。弟は一層必死になつて地図に齧^{かぶ}り付いた。

陽が落ち、辺りを黄昏^{黃昏}が包み始める。

明らかに焦り始める弟を横目で見る俺。

こんな時、駄目な兄貴でよかつたと思つ。

窮地に直面した時、弟が不安そうにすると皮肉な事に俺の頭は段々と冷静になり、心は穏やかになつていいく。

「さあて、頭を使うのはやめて、今度は身体を使うか。」

俺はそう言つて弟の肩に手を引いた。

鞄からスナック菓子を取り出して、それを道々落とし、目印にして迷わない様に歩いた。

「兄さん、これ動物とかが食べちゃつたら目印なくなつちゃうんじやない?」「

「大丈夫だ、こんな事もあるうかと、『すっぱい梅じそ味』を持つてきた。動物は『すっぱい』は食わねえだろ?」

「そうだね。それなら安心だ。」

弟がバスを降りて以来初めて笑顔を零した。

俺はそれに笑い返して、先に進む足を速めた。

本当に動物が『すっぱい梅じそ味』を食べない保証は勿論ないが、それでも言わないと弟が不安に思う。

と言つよりも、そんな事は弟も重々《じゅうじゅう》承知だが俺がそんな馬鹿な冗談を言つ事で弟は落ち着きを取り戻してくれる。出来た弟の事だ、馬鹿な兄貴を護らなければと思うのだろう。本当に駄目な兄は責任を持つて必要以上に駄目な振りをしなければならない。

少なくとも俺と弟はそつやつてバランスを取つてゐる。

すっかり陽は落ちて暗くなつた森。

唯一の救いは、晴れた空に浮かぶ満月が辛うじて視界を残してくれている事。

それとスナック菓子の『わさびポーク』を持つてきつていた事。無くなつた『すつぱイーヨ』の代わりに『わさびポーク』を落としながら、暗い森を歩く。

何処からともなく、梟の鳴き声が聞こえる。

ほんの何日か前に魔法使いの映画を見ていて、主人公の相棒である白い梟がこんな風に鳴いていたから間違いない。

2、3kmほど歩いただらうか、人里は見えず、辺りの木々が更に鬱蒼と生茂り、目にした事のない草花が目立つ様になつてきた。

「クソ婆あ、あの絵心溢れる地図は方角だけは合つてんだろうな。信じてるんだからな。」

疲れの所為もあり、苛立つてきた俺は悪態を付き始める。道はどんどん細くなつていくし、心なしか山道をずっと登り続けている気がする。

「今、何か光らなかつた?」

「あん? 俺には見えなかつたぞ。」

「確かに光つたよ、向こうの方で……」

弟は木々の間を指差すが、暗がりで数m先も満足に見えない状況で何があるのかわからない。

ハツとして、辺りの手ごろな木の枝を手に取り構えた。

『もしかしたら、獣か何かの目が光ったのかもしれない。』

声には出さなかつたがそう思つた。

弟も感じているのだろうか、俺の裾を強く握り締めている。

「だ、大丈夫だ。兄ちゃん、喧嘩だけは強いの知つてるだろ?」

『しまつた、声が震えた。』と後悔したが、弟は気付かなかつたのか、それとも気付いていない振りをしてくれたのか分からぬが、「頼りにしてる。」と俺の顔を見返してほほ笑んだ。

本当に出来た弟である。

妹ならば獣に喰われて、この世を去る前に! と勢いに任せて押し倒している所だ。

けれど、獣ではなく、民家か何かがあるのかもしない。

森の中では、その確率も低いが、万が一にもとすると容易には去れない。

俺達は光の見た方へとゆっくりと近づいて行つた。

そこには崖なのか、植物の集合体なのかよくわからない、草木に覆われた丘が聳え立つてゐる。

目を凝らしてよく見ると、草木の隙間から金属の様な物が見えた。

光の正体はその金属が月明かりを反射したからと思われた。

俺は絡まつてゐる蔓を引き剥がし、その金属を掘り起こそうとした。かなり大きいソレは完全に草木に絡まれており、少し剥がしたくらいではその全容を現さない。

金属と土の様な素材で出来たそれに、何か文字が書かれている。

かなり古いものなのか、その文字は掠れていて、辛うじて一行読める程度だつた。

『虚構よりも眞の現実を……』

「兄さん、これは一体?」

言い知れぬ不安感が湧きあがる気がした。

弟もそうなのだろう、少し声が震えている。

けれどそれと同時に湧きあがる探究心が、纏わりついた蔓を更に剥がさせた。

ある程度剥がすと、それが人型をしている物だと分かつた。
無我夢中で蔓を剥がし続け、その全容が明らかとなる。

「なんだ、こりや……。」

巨大な人型の建造物。

体長は三メートル程だろうか、少なくとも俺と弟の倍くらいの大きさはある。

頑丈そうな不思議な素材でできた身体。
まるでSF映画^{エスエフ}に出てくるロボットだ。

文字が書いてある部分の下には紫色の水晶玉の様な物が付いている。
そこだけ明らかに違う素材で出来ていたので俺は何気なく、その玉に手を触れた。

すると触れた部分が強烈な光を放ち始め、周囲の大気を吸い込む様にそれを中心に風^{すき}が吹き荒ぶ。

恐怖を感じ、手を放そうにも不思議とその手は離れない。

「ふ、ふざけんな、なんだよこれ。」

懸命に引っ張るが、玉に吸いつく様に俺の手は離れようとしない。
弟が後ろから腰に手を回して一緒に引っ張るが、二人がかりでも一向に離れる気配はない。

「何だか、やっぱそうだ。お前は早く離れろ！」

「兄さんを放つて離^{またた}れられるわけないだろ！」

さらに強い光が瞬き^{またた}、視界を奪われる。

そして身体が宙に浮く様な感覚の直後、何かが炸裂した様な音と共に俺は身体を吹き飛ばされるような感覚に襲われた。

薄つすらと田を空けるとそこは木々の生茂る森の中。
何かが爆発した氣がして、死んだと思ったが生きているし、身体も
どこも痛まない。

周囲もなんら変わらず、陰気な森の中のまま。
ただし、かなりの時間氣を失っていたのか、すっかり朝日が昇つて
いる。

傍に倒れていた弟も目を覚ます。

「 に、兄さん？ 僕達一体？」

「 どうやら、何ともないみた 」

それに気づいた俺は驚きに声が詰まらせた。

氣を失う前にあつたはずの、巨大な人型の建造物が跡形もなく消え
ている。

目を擦つて確認するが、やはりないものはない。

「 どこに行っちゃつたんだろう？ 」

「 さあな。この風景からして、俺達がふつ飛ばされたわけでもなさ
そうだし、あの巨人が勝手に何処かへ行つたとしか思えないな。 」

「 あれって、動くの？ 」

「 さあな。俺が知るわけないだろう。それより、婆ちゃんがきっと

心配してる、陽のある内になんとか辿り着こうぜ。 」

歩き出して、すぐに一つの疑問が浮かんだ。

ばら撒いてきたスナック菓子が一欠けらもない。

まさか本当に動物が食べたのか？ と特にそれ以上は気に留めなか
つたが帰り道がわからなくなつたのは少し不安だ。

一時間程、当てもなく歩き続けた所で「兄さん、あれって。」と弟
が何やら上方を指差している。

その方向へと視線を向けるとそこには周囲の木から頭一つも一つも

抜け出した巨大な木が聳え立っていた。

「クソ婆。本当にだけじゃねえか。でもバス停からじゃさすがに見えねえよ……」

俺と弟は行く足を速めて、その巨大な木へと歩を進めた。

大きさの所為か近くに見えた木が意外に遠い。

しかし、人間って生き物はゴールが見えると頑張る事ができる現金な生物で、距離はあつたが、不思議と辛さは感じない。

巨大な木の下に着いた頃には一軒の小屋がすでに視界に入っていた。地図の絵とはかけ離れた雰囲気の小屋だつたが、そこは敢て突っ込む事はせず、急ぎ駆け寄る。

平屋の古い家と詰つか、小屋。

外には今時珍しく井戸があつたが、苔塗れな所を見るとさすがに使つては無いのだろう。

けれど、こんな森の奥まで水道つてのは通つているものなのか？と疑問に思つたが気にしない事にする。

俺は古惚けたその小屋の扉を勢いよく開けて、声を張り上げた。

「遅くなつてすいません！ 孫の日向奔と翔ひなたはしる かけむです。婆ちゃんいますか？」

玄関向こうに広がる木製の床で出来た長い渡り廊下に向かつて大声を出すが返事がない。

それからも何度も「すいません。いらっしゃいませんか？」と繰り返す。

やがて廊下の奥から「何度も言わなくたつて聞こえているよ！ 年寄り扱いするんじゃないよ、まったく。」と悪態を付く年配の女性の声が聞こえた。

「絶対聞こえてなかつただろ？ が……」

「何か文句でも言ったかい？」

小声で呟いた声を見事に聞き取り、反応が遅かつた割に地獄耳だった祖母の怒声が飛んできて、俺と翔は思わず口を手で塞いだ。

「まつたく、誰だ」

祖母らしき年配の女性が目の前で驚きの表情を湛えて立ち止った。手に持つている蜜柑が床に落ちて、ぐちゃりとなる。

初めて会う孫に感動しているのか、まるで死人でも見るかの様な驚き表情。

「お婆ちゃん、初めまして。俺が奔で、こっちが翔です。」

人見知りの激しい翔は声を発さず、軽く会釈した。

祖母はまだ驚いているかの様な表情で右手を前に差しだし、ゆっくりと俺達に近づいて来た。

差し出しされた手の指先が何やら小刻みに震えている。

『予想以上に耄碌もうろくしてんのかな?』と少し心配になる。

「そ、そんなに驚かなくても。確かに道に迷つて一日遅れちゃったけど。」

「あんた達、死んだんじゃ……」

「は? そんな大袈裟な、一日遅れたらいで。」

「家族四人、事故で死んだって……」

「父と母は亡くなりましたが、俺達は生きていますよ。御厄介になると連絡を入れた筈はずなんですが?」

「あんた達、モンスターだね? 私を騙そうたつてそういうはないよ!」

「いや、ちょっと、婆ちゃん ぐつ!」

祖母が手に持つていた杖を俺に向かつて翳かざした瞬間、柄の部分に付いていた見覚えのある様な紫の球が光を放ち、放たれた光が俺の身体を貫く様に奔はしつたかと思うと同時に腹部に激痛を感じた。

「ちよつと、待つてくれよ。つてか一体今何したんだよ?」

「問答無用じや! この変身モンスター!」

俺が両手を上げて降参のポーズを取つた瞬間。

祖母は振り上げた杖をそのままに動きを止めた。

「お前、その腕のM a g i c マジック r e a l i t y リアリティ d e v i c e デバイスをどこで手に入れた?」

腕を見てみると見覚えのないブレスレットが嵌められている。

そのブレスレットにも祖母の杖と同じ様な紫の球が嵌められているのに気が付いた。

祖母はブレスレットをとても気にかけている様だが、俺にはいつ嵌められたのか、これが何なのかも皆田見当がつかない。

「は？ 何だつて？」

「その腕につけているM·R·Dの事を聞いているんじや。」

「マジックなんとかだか、エムなんとかだか知らねえけど、俺にはわけがわからねえよ！」

「まあモンスターがM·R·Dを付けているわけがない、話だけでも聞いてやろう。」

そう言って、祖母は杖を下したが、警戒した様子はそのままに、俺と翔を中へと招いてくれた。

古惚けた外見通りの古惚けた廊下を後に付いて進むと、祖母の寝室らしき部屋へと招かれた。

寝室には大きなパソコンが置いてあって、無数の配線が壁や床に張り巡らされていた。

その光景はまるで『電子の森』だつた。

椅子に座るよう促された俺達は、軋みの激しい木製の椅子に腰かけ、バス停に着いてからここに来るまでの事や、自分達の事を思いつく限り祖母に話して聞かせた。

しばらく訝しげな表情で考え込んでいた祖母は、自分の頭の中身を整理するかの様に淡淡と語り始めた。

「父親と母親を事故で亡くして、貴様らは祖母である儂を頼つてここまで来た。しかし、ここに向かう道中、不思議な人型の建造物を見つけ、それに触れて氣を失つた と。お前達の言つている事が本当なら、お前達はもう一つの世界から来たのかもしけん。」

「は？ それはどういう

「パラレルワールド 多元世界って事ですか？」

「は？ パラ……なんだよそれ？」

「考えられん事だが、どうもそつらじい。お前達がMRDの存在を知らない事も頷ける。」

「こっちの世界では、それは当たり前の物なのでしょうか？ それはお婆ちゃんが先程使つた不思議な力と関係が？」

「おい、待て話を進めるな！ パラなんとかの件からもう一回

「お前達の世界には魔法も存在せんのか？」

今の質問の意味はわかる。

俺も翔もさすがに言葉を失つた。

魔法なんでものはRPGや御伽話だけの存在で現実にあるわけがないと言うのが俺達がいた世界の常識。

しかし、どうもこっちでは違つらしかつた。

「魔法があるってのかよ？」

「ああ、そこから説明が必要なのかい。少し長くなるぞ？」

祖母は億劫そうに眉間に皺を濃くして、俺と翔の顔を見渡してから確認する様に言った。

「結論から言え、こちらの世界には魔法が存在する。しかし、それもほんの20年ほど前に生まれたものだ。事の初めはVirtual Reality gameだった。そっちの世界にもゲームはあつたじやろ？ 元は視覚や聴覚のみで楽しむ遊びだつたそれに他の感覚機能への刺激を追加したのじや。痛覚や、触覚、味覚や嗅覚。そこまで来るとその世界は一種の仮想現実となる。ここまではわかるな？」

辛うじて、納得はできないが理解はできる説明に曖昧に首を縦に振ると、祖母は湯飲みの茶を一口飲み、続けた。

「大勢の人間がそれに没頭したよ。その内に今度はアダルトな目的に使用され始め、仮想現実で男は絶世の美女を抱き、女は絶世の美男子に抱かれたわけだ。そこまで来るとVR『仮想現実』技術が進歩し、普及するのはあつという間じやつたさ。ひつひつひつ

と下卑た笑いを浮かべる祖母。
アダルトな件辺りから慌てて翔の耳を抑える俺。

「兄さん。今、お婆ちゃんなんて？」

「世の中には知らない方がいい事もあるんだ。さあ婆ちゃん続けてくれ。」

「人間は完全にVRにのめり込んだ。すべての欲望を満たしてくれるわけじゃから当たり前じゃな。しかし、人間とは愚かな生き物で遂にはそれだけでは飽き足らず、VRの外、つまり現実の世界に仮想を持ち出そうとしたんじゃ。それが魔法の始まりじゃ。儂の杖や、奔のブレスレットの様なMRDが開発された。MRDを介せば、仮想を現実に変えられる様になつたわけじゃ。」

「そりやあ一体どういう仕組みなんだよ?」と俺は腕のブレスレットを睨み付けた。

嵌めこまれた紫の玉が鈍く光つた気がした。

「研究の結果、MRDを介して仮想を現実に変えられる量には個人差がある事が分かつた。その力を魔力と呼んだ。魔力の多い者ほど大きな仮想を現実へと変える事ができるし、魔力の小さい者は小さな仮想しか現実にできん。まあそんな魔法に関しての研究を魔科学と呼び、日夜研究され始めたのが最近の事じゃ。MRDを悪用してモンスターを生み出す輩が現れだしたのも最近の事じゃが……」

「モ、モンスターがいるのかよ?」

「召喚魔法と呼ばれる技術じゃな。かなりの魔力がないと出来ない事じゃが、MRDを持つてすれば可能じゃ。勿論、魔科学に関しては魔力の大小や召喚魔法以外にも色々あるが、それは追々『おいおい』でいいじゃろつ。大体この世界の事はわかつたか?」

正直いまだに理解はできても、納得はできない。

信じる事ができないと言つた方が正しいか、祖母の話は俺達の世界

では漫画や小説なんかで描かれる空想の話と何ら変わらない。

けれど祖母が不思議な力を使うのを目の当たりにした俺達は信じるしかなかつた。

そんな世界に飛ばされたのなら、俺達が時空を飛び越えたのも強ちあり得ない話でもない。

「それじゃあ僕達はそのM R Dの力でこの世界に呼ばれたつて事になるのかな？」

一瞬、困惑した表情を浮かべた祖母だったが、自信なさげにゆっくりと答えた。

「正直、それは考えられん。時空転移や時間転移は理論上は可能だが、あまりにも膨大な魔力が必要で、そんな魔力を持つた者は絶対に存在するわけがない。もしそんな化け物じみた魔力を持つ者がいたとしても、現存するM R Dでは、そこまで強大な魔力に耐える事は絶対にできん。」

この世界の事は大体把握した。

俺達の世界とは別の選択をしたもう一つの世界。

並行世界、多元世界とかつて呼ばれるものらしいけれど、正直そんな事はどうでもいい。

何故俺達がこの世界に来る事になったのか？ そしてどうすれば、元の世界に戻る事ができるか？ そつちが知りたい。
けれど、俺達にとつて最重要のその問題に関しては、解決の糸口すらも掴めず、祖母には皆目見当がつかない様子だった。
もちろん、俺達にも分かるはずもない。

そして、あの大きな人型の建造物は一体何だったのか？

大きな疑問を無数に残したまま、俺達兄弟はこっちの世界で暮らす事を余儀なくされた。

「翔、お前は何を読んでんだ？」

俺と翔は空を走るバスに乗せられていた。

内装や外観は俺達の世界のバスとなんら変わりないが、こっちのバスは空を飛ぶ。

俺と翔は祖母に「しばらくこの世界で生活するのなら」と半ば強引にこの奇妙なバスに乗せられ学校へと向かつている。

向こうの世界でも通う筈だつた学校『県立謳花学院』^{けんりつおうかがくいん}。けれどその名称はこっちの世界では若干異なつて、『魔立謳術学院』^{まりつおうじゅつがくいん}。

最早、聖なる学び舎とは思えないアニメチックな名前がついているのである。

「そもそも『魔立』ってなんだよ?」という葛藤^{かうとう}と戦いながらもバスに揺られているというわけだった。

「……こっちの世界の僕は凄く優秀な魔鍊師^{まれんし}だつたみたいだから、予習を、ね。」

魔鍊師とは『仮想を現実に成す者』の総称らしい。

こちらの世界でも我が可愛い弟は優秀だつたと祖母に聞かされた。さらにはこちらの世界でも俺は駄目な兄貴だつたと出来れば知りたくはなかつた情報も聞かされた。

直向きに教科書を読み続ける翔の顔を一瞥した後、外に視線を投げた。

空飛ぶバスはいつの間にか森林地帯を抜けて、街へと出でていた。

目の前に広がる街は、俺の知る街と大きな違いはなかつた。

空飛ぶ車やバスやトラックが目の前を走り過ぎていく事。

そして、高層ビルの数が俺の知る街よりも200%程アップしている気がする事を除いては。

学校前のバス停で降りると更に予想外な展開が俺達兄弟を待っていた。

教科書を手放そとしない翔の手を引いてバスを降りると大勢の女性学生が翔へと群がつてきたのだ。

俺は鼻息の荒い女学生たちの勢いに気押され、あっさりと翔を差し出し、自分はそそくさとバス停のベンチへと非難した。

教科書に夢中になっていた翔は気が付いた時には女学生の群れに飲み込まれたのだろう。

揉みくちゃにされながら、甲高い悲鳴を上げた。

俺が避難先のベンチで足元にある雑誌に気がついて拾い上げると、そこにはでかでかと翔の写真が載つていて隅には小さく俺の写真も載つていた。

『奇跡の生還！ 天才魔錬師、日向翔とその兄』

「その兄って……、俺も奇跡の生還者って事になつてんだから友人A的な扱いしてんじやねーよ。」

その見だしの後には翔が如何に凄い奴かつて事が書き連ねられていた。

どうやらこちらの翔は俺達がいた世界の翔より圧倒的な有名人だつたらしい。

『最年少、最上級魔錬師』『新術式開発』『天元十師任命』。

記事に書いてある翔の経歴にはよく分からぬ単語ばかりだが、凄い奴だつたつて事は不思議と伝わってくる。

「こっちの俺は俺よりも劣等感があつたかもしけないな。」ところの俺の心中を想像し、思わず自嘲を浮かべた。

「に、兄さん、助け　て　」

バス停のベンチに腰を降ろし、呑気に拾つた雑誌を読んでいた俺がやれやれと首を振りながら女学生に囲まれた翔を救出に向かおうとした時だった。

眩い閃光が視界の左端で弾け、足元の石床が砕けて飛散した。

そして直後に地面を搖るがすほどの轟音が鳴り響く。

俺は碎けた石床の飛礫が脛に直撃し、痛みのあまり涙ぐんでその場にしゃがみ込んだ。

一体何が起こったのかと辺りを見渡すと、翔に群がった女学生達があとすさ後退りしながら口ぐちに呴いた。

「……この魔法、下級師クラスの千早世良羅じやない？」

「雷神、世良羅……。」

不安げに呴く女学生達の表情が恐怖の色を深める。

そして視線が一点に集中し、俺はその視線の先を追つた。

周囲の視線を一身に受け、淡々と歩を進めるのは同じ学生服をきた少女。

毛先にカールのかかつた腰くらいはある長い金髪、大きくて少しつり上がつた気の強そうな金色の瞳。

身長は翔くらいだろうか、俺よりは少し小柄な目も眩む様な美女が立つて いる。

「神々の畏れたる雷鳴よ

「やばくない？　また詠唱してんじゃ？」

「我が猛る怒りをその神槍に宿し

小さな声で何かを呴きながら歩を進める世良羅と呼ばれた美女。恐れ慄く女学生達。

やがて、世良羅を薄らと光が包み周囲には電流の様なものが見え始め、所々で火花が散り始めた。

目の前を通り過ぎながら火花を散らす奇妙な世良羅のあまりの美しさに迂闊にも瞳を奪われた。

「 兄さん！ その娘、序歌を詠んでる！ 本気だよ！ 早く止

めて！」

見惚れて呆けていた意識が翔に引き戻され、言葉に従い世良羅の括られた細い腰を一心不乱に抱き止めた。

振り向いた、世良羅の顔に驚きが宿る。

ふつくらと柔らかそうな唇から紡ぎだされた言葉は「馬鹿？」。

その直後、目の前に走る閃光。

激しく身を撃つ激痛。

薄れゆく意識の中に仄かに鼻を擦る世良羅の香り。

激痛と世良羅の柔かさから出でる恍惚により俺の意識はやがて途絶えてしまった。

消毒液の香りと肌を擦れる覚えのある独特な感覚。

目を開けると、見覚えはない場所だつたが何故か懐かしい風景。

「 保健室か？」

誰に呟いたでもなく言葉を発した喉は驚くほどに掠れていた。

「 確か俺、あの金髪巨乳に」

目を擦りながら呟いた俺の右頬に痺れる様な痛みが走る。

静かな部屋に響き渡る乾いた炸裂音。

半開きだつた目が一発で見開き、目に入つたのは先程の金髪美女、世良羅。

「 えつと、あなた様は……どなた様？」

「 やつぱり触つていたのか！」

釣り上がり氣味の目尻がさらに釣り上がり、金色の瞳はきらきらと潤つている。

再び響く炸裂音。

右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せと言つが、差し出す前に左頬はぶたれてしまった。

「何すんだ！ 痛いだろ？ が！」

「私の胸を触つただろう！ 触られた感触はあつたんだ！ 私の事を巨乳などと辱めたのが何よりの証拠だ！ この変態め！」

「触つてねえよ！ あんたの胸がでかいのくらい見ればわかるだろ？ が！」

「やはり見てはいたのだな！ 見ていたら触りたくなつたのだな！ 確かに聞いたぞ！ 恥を知れ！」

怒声を捲し立て目に涙を溜める世良羅を見ていると、何だか自分が悪者の様な気がしてきた。

俺はそんな無意味に湧き出た謎の自責の念を振り払う様に首を左右に振つてから仕切り直す事にした。

「まあとにかくあなたも俺に電撃くらわした上におまけの往復ビンタもかましたんだから、あいこでいいだろ。」

そんな言葉では勿論納得しないであろう世良羅は俺を睨みつけ肩を震わせていたが、力一杯鼻を啜つて、目に溜まつた涙を制服の袖でぬく拭つた。

「電撃をくらわす、と言つがあれば君が悪いのだろう。序歌を詠唱している帶魔状態の私に抱き掴みかかつたのだからな。それに直前に私の電撃を見ているのだから、私が魔力放出系の魔鍊師だと分かつていたはず。そんな私の帶魔状態の胸 いや、腰に掴みかかれば当然ああなるだろ？」

この世界では当然の用語なのだろうか、時折不自然に顔を赤らめながら小難しそうな用語をつらつらと人差し指を立てながら語る世良羅。

「まあな。」と分かつたふりをして相槌をうち、「でも止めなきや撃つていたんだろう？ 何であんな事をする？」と問うと世良羅の表情が強張るのが見えた。

折角目尻が下がり和らいだ表情になつたのに、その間に再び目尻せつかく

が釣り上がる世良羅。

「目障りだつた。それにあそこにいたのは天才魔錬師の田向翔だろう? ならお前が止めなくとも私の魔法くらいあいつが防いでいたさ。」

顔を背けて、嘲笑を浮かべながら簡単に言つてのける世良羅を見て、胸がざわつくのを感じた。

この世界はこんなにも簡単に人を傷つける事を冗談みたいにやってしまうのか?

それが怖かった。

ゲーム感覚なのかもしれない。

VRから派生した様な今この世界ではこれが当たり前なのだろう。本来この世界の人間ではない俺には、そんな事は到底納得が出来なかつた。

考えるよりも先に身体を動いていた。

言い終わつてその場を去ろうとする世良羅の腕を掴む。

驚いた表情で世良羅は腕を掴む俺を見返した。

傷つけるつもりなんてないのに、不思議と掴んだ手に力が入る。

そこから敵意を感じたのか身構える世良羅。

「魔法だか何だか知らないが、一度とあんな使い方をするなよ。」

俺の言葉に拍子抜けした表情になつた世良羅は俺の腕を煩わしいといつた態度で払つた。

緊張が解けたのか竦めていた細い肩が少し下がる。

「君に指図される謂れはない。」

大袈裟な程にツンとした態度を取つてその場を去る世良羅に俺は何も言えなかつた。

確かに謂れがない。

彼女達の常識と俺達の常識の隔たりを確かに感じた気がした。

「そんな事はないと思つよ。」

聞き覚えのある声。

世良羅が開け放しのままにしていった扉の外に翔がいた。

「今日一日、こちらの世界の人達を見ていたけど僕達とそう変わらないよ。彼女もきっと悪いと思ったから兄さんの傍に一日中付いていたんじゃないかな。」

「お前はエスパーか？ 兄の心を読むな。」

舌を出して、照れ笑いを浮かべる翔にベッドを下り、鼻の頭をこづいてやつた。

そこで俺はやつと聞き捨てならない言葉に気が付き、不覚にも素つ頓狂な声を上げてしまった。

「え？ 一日中？ 入学式は？」

ハンガーに掛けた制服の上着を羽織りながら外を見るとすでに茜色の空が広がっていた。

保健室の出入り口で状況がいまいち飲み込めず硬直する俺の肩に、そつと手を乗せた翔が首を左右に振つて溜息混じりに呟いた。

「全部、もう終わっちゃったよ。」

こうして、俺の記念すべき学園生活一日目は人知れず、いや、俺知れず終わりを告げた。

日が沈み、闇に包まれた山道の上空を来たバスの乗つて帰る。

俺達の世界では一時間に一本のバスも、こっちの世界では大幅なシヨートカットのお陰か十五分に一本は来るから乗り逃す心配もない。

良い子の俺や翔はすでに眠つている時間まで走つていてるくらいに終電も遅い。

さらにはバスを降りれば、徒步五分で祖母の家。

あの暗くて恐ろしい山道を震えながら歩いていたつい先日の事が嘘

の様に快適だつた。

夜も更けて、家に帰り着いた俺と翔は祖母と暖炉を囲んでいた。この時代に、しかも俺達より更に科学が発達している世界で暖炉は時代錯誤もいいところだが、古臭い雰囲気は嫌いじゃない。ほんのりと明かりの灯つた部屋で鍋をつつくのは、まだ少し混乱する心を落ち着かせてくれる。

「婆ちゃん、こつちの翔があんなに有名人だなんて聞いてないぞ。バレちまうんじやないか？」

「翔は自分の力や知識をひけらかす様な子じゃなかつたから大丈夫だろう。　求められた時に結果さえ出せればね。」

「無責任だな。俺なんて今日死にかけたつてのに。」

「大丈夫。あんたはちょっと死にかけるくらいに間が抜けているほうがアリティがあるつてもんさ。」

横を見ると姿勢を正して食事を食べながらも教科書を読む翔がいた。懸命に勉強する弟とまだ教科書を開いた事すらない兄。確かにこの構図がこつちの世界のリアルでもあつたのだろう。

俺達が通う事になつた謎術学院は俺達に馴染みのある学年制ではなく、階級制という制度があつた。

下級師クラス、中級師クラス、上級師クラス、そして最上級師クラス。

年齢に関係なく、試験に受かつたものが進級できる実力主義の学校。俺と翔は下級師クラスに入学する事になつた。

こつちの世界の俺達も謎術学院の下級師クラスに入学する予定がつたらしく、案外とすんなりいつた。

最上級師だったこつちの世界の翔は兄の俺と同じクラスを望んで下級師クラスへと編入したらしい。

まるで祖母の家に行く事を決めた時の俺達みたいに、こつちの世界の俺達も駄目な兄に弟が付き添うという構図は皮肉な程にそのまま

だつ
た。

入学式の翌朝、昨日の事もあって少し早めに家を出た俺と翔は空飛ぶバスに乗つて学園へと向かつて行った。

翔の耳には祖母からもらったMRDが紫色の輝きを放つている。MRDとは紫色の玉を差しており、それ以外の装飾はまちまちの様だ。

（翔のMRDの方が洒落てるじゃねー）

と腕のMRDに視線を落とした。

祖母もこのMRDのモデルは見た事がないと言ひ。この異世界に飛ばされた事に何か関係があるのだろうか？そんな事を考えている間に学院の前へとバスが到着した。

昨日の騒ぎで懲りたのか、それとも時間をずらした事が功を奏したのか翔の追つかけらしき女学生達が今日はいなくて、ホッとした。がその安心も束の間で更に会いたく人間が不機嫌面をぶら下げてこちらに向かってくる。

相変わらずの美しい容姿。

周りが霞むほどに目立つ、カールの掛かつた金色の髪に勝気な金色の大きくてやや吊り上つた瞳。

さらにはワイヤシャツのボタンが弾けんばかりの大きな胸に、それに反比例するかのように括れた腰。

昨日の事がなければ、危うく一寸惚れしてしまつといひだ。

思い返して無視するべきかと迷つたが（同じ下級師クラスだから気まずくなりたくはねえな。）

そう考えた俺は引きつる類の表情筋を総動員して吊り上げ、勤めて明るく手を上げて「世良羅さん！ おはようー」と挨拶をしたが、世良羅はあつさつと俺の前を通り過ぎた、聞こえなかつたわけじゃない。

すれ違ひざまに「ふん。」と鼻を鳴らして いたから間違いない。

「あんた、そんなんじゃ あ友達できねえぞ。」

ついつい悪態あくたいをついてしまうのが俺の悪い癖だ。

俺の前を過ぎ、数歩先で足を止めた世良羅が小刻みに肩を上下している。

（あ、やべえ。）と思つた時にはすでに遅く、不機嫌面に磨きのかかつた世良羅が振り返り、つかつかとじり寄つて來た。

「世良羅と呼び捨てにされるのも気に入らないけれど、あんた呼ばわりはもつと氣に入らない！ 初対面なんだから千早さんと呼びなさいー！」

「いや、おい、初対面つて 」

「うるさい！ うるさい！ うるさいー！ 君に会つた昨日を消したいわ！ 今日も会わない様に早く家を出たのになんでいるの？ 今日も消してしまいたくなつてしまつたわー！」

「そりやあないだろ 」

「とにかく、いいから、黙つて聞きなさい。今後一切、私に話しかけない近寄らないを貫きなさいー！」

肩を大きく上下させ、息を切らすほどに言葉を吐き出した世良羅が俺の返事を待つことなく勢いよく前に向き直り、再び歩き出した。心配そうに俺の裾を引っ張る翔に急かされるよつとして、俺達も後を追つて学園へと向かつた。

昨日バタバタしててよく見れなかつたせいか、すぐ新鮮に見える学園。

学園の門は童話に出てくる巨人でも潜れそなぐらに大きく、白い支柱は毎日磨かれているのか顔が映りそなぐらに綺麗で朝日を反射して輝いている程だ。

一步門の中に入ると緑の多いキャンパスが出迎えてくれた。装飾の施された豪華な花壇によく手入れされている植木が並んでいる道を通りて学院内へ。

玄関は吹き抜けになつていて、朝日が溢れんばかりに差し込んでくる。

長い廊下は突き当りが見えないほどに続いている。

外から見ても敷地が大きい事は分かつていたが、中に入つてみるとまさかこれほどとは思つていなかつた。

「驚いたでしょ? 僕も昨日は凄く驚いたよ。」

確かに驚いた。

俺達のいた世界の学校とは大きく異なるその光景はここが異世界なのだと再認識させてくれるには十分すぎた。

俺は翔に案内され、教室へと向かつ。向こうの世界と同じように『理科室』や『家庭科室』なるものがあつたが、中には『方陣室』や『召喚室』となるべくお近づきになりたくない部屋もある。

『下級師クラスB組』と書かれた部屋の前で翔が「こいだよ。」と俺を中に入るよう促した。

どうやら下級クラスの中でも組分けがなされている様でA、B、C組の内、俺と翔はB組になつたみたいだ。

大きく息を吸い込んで扉に手を開けた。

昨日は一度も教室に顔を出せず、クラスメイトとも面識はない。気分はすでに転校生だ。

元々、異世界からの転校生みたいなものだが、翔に先を越されたのが孤独感を増大させる。

目を強く瞑り、木製の白い扉に手をかけて勢いよく開く。

好奇の目で見られるのか、疎外的視線を向けられるのか、はたまた

……

「つて誰もいねえじゃねえか!」

綺麗に整列された机と椅子には誰もおらず、電気もついていない教室に俺の渾身の突つ込みだけが響き渡つた。

「ま、まだ早いからね。」

苦笑いを浮かべてそう言つ翔を見返し、どうしようもなく恥ずかしくなつた俺だつたが兄の威厳を保つべく平静を装つて席へと着く。

「兄さん……」

「なんだ、翔？ お前も早く席に着け。」

「そこ僕の席なんだけど……」

動搖のあまり席に書かれた苗字だけを見て、つかり翔の席に着いてしまつた俺は視線を翔には向けずにそつと尻を椅子から浮かせてすぐ後ろの自分の席へそそくさと移動した。

それからH.R.が始まるまで翔と目を合わせる事ができなかつたのは言うまでもない。

クラスメイト達がぱらぱらと登校してきて、無人だつた教室の席が次第に埋まり始め、心なしか電球の照度が上がり、気温も上がつていく様な気がした。

冷たく恐ろしいイメージのある無人の教室が、人が一杯に入つた途端に活気が溢れ雰囲気が大きく変わつたから不思議だ。

人懐っこい者はすでに友達が出来てゐるのだろうか、挨拶を交わす者や机を挟んで会話してゐる者がいる。

俺は生來、人見知りはしないが決して人懐っこいタイプではないので黙して机に座しながらも周囲のクラスメイトをチラ見する。

始業のチャイムが鳴り、席に着かずに楽しげに会話してゐた連中もそのチャイムに慌てて自分の席に着席する。

チャイムから教師が扉を開くまで、数分の静寂があり、その間何故だか無駄に緊張してしまつた俺はお尻の辺りにじんわりと汗をかいだ。扉を開けて入つて來た女教師と思しき人物は俺とそう歳が変わらなかつた。

眉辺りで綺麗に切り揃えられた黒の前髪。
肩の下で綺麗に切り揃えられた黒の後ろ髪。
いくらいに若かつた。

扉を開けて入つて來た女教師と思しき人物は俺とそう歳が変わらなかつた。

シャツも黒。

中に着ているシャツも黒なら、瞳の色も黒、マニキュアまで黒で、恐らく下着も黒なのだろう。

グラマラスな体系を黒で無理矢理引き締めた女教師は油断からどうか、はたまた過信なのだろうか、黒いシャツの胸元は第三ボタンまでおっぴろげで飛び出さんばかりの巨乳と言つ括りにはすでに収まり切らないであろう爆乳をひけらかしている。

本当にこれは教師なのだろうか、と疑いたくなるほどに囁つきの悪い黒づくめの女教師が教壇に立ち、ファイルを叩きつけた。

「「ミ虫共。出欠を取るからハキハキ返事をしをらせ。」

（いや、教師じゃねーだろ。こいつ。）

「えー、クソ安藤。」

「は、はい。」

「あー、ミ浦田。」

「ゴ……、はい。」

「クソ」だの「ミ」だのを生徒の名前に付け加えつつ女教師の点呼は続く。

「クソビツチ千早……、千早世良羅は今日もいねえのか？」

世良羅が同じクラスだった事に俺は初めて気が付いた。

辺りを見渡すと空席が一つ。

あそこが世良羅の席なのだろう。

朝、校門の前で会つたから登校はして来ているはずなのだが、なんて考えたが報告する義務はないのでそのままスルーする事にした。何せ俺は冷徹な男ではないにしろ、お節介を焼くタイプでもない。そして更に点呼は続き

「えつと、昨日女にのされた哀れで惨めなミでクズな日向兄。」

こめかみの辺りが脈打つたのを感じたが、世渡り上手を駆使しつつ足りない能力を補う人生を送ってきた俺は心を落ち着かせて笑みを湛えて返事をした。

出欠の点呼を取り終わり、女教師は右手で頭を搔き、左手をシャツの下から中に突っ込み腹を搔きながら話し始めた。

乱暴に突っ込まれた左手とシャツの隙間から覗く、ヘソのチラリズムは男子生徒の思春期ゆえの妄想をかき立てるには十分過ぎるものだったので、心中で（「馳走様です。」）と呟いた。

性格は明らかに悪い女教師だが、補つてあまりあるほどに容姿がいいのは認める。

先程の罵倒はすでに頭の片隅にすらなく、（楽しい学園生活になりそうだ。）などと頭に花を咲かせている。

「あたしが雑魚下級師クラスB組の担任をする事になった、最上級師クラスの御手洗静琉だ。とりあえずはあたしが卒業するまではこの担任をするからな。口を噤んで、ただただ付き従え、そして敬まえ！」

前の席に座っていた翔が振り返り俺に説明をしてくれた。

どうやら、俺達の世界で言う教師とは異なり上級生が下級生の教師を務めるシステムらしい。

だから当然教師になる者に人間性を求めてはいけないと言つことになるのだろう。

「　おい、日向兄。あたしが喋つているのだから地蔵の様に口を噤んで話を聞け！」

静琉は俺を一喝して教壇から降り、淡々と語り始めた。

踏み出す度に上下する静琉の胸部に男子の視線は集中したが、この世界に慣れない俺には静琉が語る話の方が興味を引いた。

「貴様らは最下級のクズだから基本から説明してやるが、そもそも魔法と言つのは名ばかりで正しくは我々魔錬師は想像を具現化する事により、特殊な力を發揮する。」

ここまででは祖母の説明で理解もしているし、仕組みはわかつていながその事実に対しては納得している。

「この想像を具現化する行為を【鍊成】と呼ぶが、鍊成するには手順がある。まずは【思念化】。色や形などをできるだけ具体的に想

像する事だ。そして次に【流動化】。思念化により想像した対象及び部位に魔力を流し込む事だ。例えば炎を口から吐き出したいと思念化した力を鍊成したいのなら、口腔内に魔力を流し込まなければならぬ。その行為を流動化と呼ぶ。そして、最後に【集束化】。先程の例えで言えば、口腔内に流し込んだ魔力を集束して、思念化情報を具現化する作業だ。思念化、流動化、集束化の三点が上手く行われる事で魔法の練成は完了する。

正直、そんなに簡単なのかと啞然^{あぜん}となつた。

もつと代償的な物が必要だつたり、煩わしい手順を踏まなければ魔法は使えない物だと思っていたからだ。

口を開けて呆けている俺を一警した静琉は眉間に皺を寄せて続けた。

「最下級のゴミである貴様達でも分かつてゐるとは思つが、思念化、流動化、集束化は簡単な事ではない。思念化する為には【フォーマット】をMRDにインストールしなければならないし、流動化で上手く魔力を供給しなければならず、それにはMRDの操作を熟知していなければならぬ。さらには集束化で供給した魔力を凝縮し具現化しなければならないが、それにはコツや才能が不可欠だ。

「教鞭を伸ばし、俺を指す様にして振り回す静琉。

明らかに俺に向けて言つてゐるのだろうと推し量るのはその態度からも容易である。

静琉は教鞭を自分の肩に担ぐ様に置き、面倒臭そうに欠伸^{あくび}まじりでさらに続けた。

「まあ色々と制約はあるにしろ、簡単な魔法鍊成は義務教育のガキにだつて使える。この学園は貴様ら雑魚を人の役に立てるレベルの魔法鍊成が行える様にする為の施設だ。 さあ貴様らの足りない脳味噌で理解できたなら体育館に移動するぞ。」

暴言を一通り吐き終わりすつきりしたのか、静琉はやつとの事で笑顔を浮かべた。

しかしその笑顔に仄かな恐怖抱く俺達生徒は言われるままに静琉の

後に従つて体育館へと移動し始めた。

長い廊下を渡り、学園内の最深部にある体育館へ。

教室のある中心部から最深部の体育館までは歩いて15分近くもかかつたからこの学園の不気味なまでの巨大さを身体で認識する事が出来た。

体育館は木目状の床に綺麗にフックスが掛けられていて、様々な色のテープで線が引いてある。

ここまででは俺達の世界とそう変わらないのだが、やはりこの学園の体育館だけあり、広さは馬鹿げていた。

バスケットボールのコートなら10個くらいは作れそうな、グラウンド並の広さを誇る体育館など見た事がない。

俺達の組が一番早かつたようで、同じ様に担任に率いられ、不安そな面持ちで他の組の連中も体育館へと入つて来た。

組ごとに整列させられ、姿勢を正して待つと、眼鏡をかけた前髪の無駄に長い男が体育館奥のステージの上に立つた。

その時、後方にある体育館の扉が大きな音を立てて開いた。

生徒達全員が突然の大きな音に驚き、一点に視線が集中する。

俺も同じように音のする方へ視線を向けると不貞腐れた顔をした世良羅が立っていた。

制服の上に羽織った白いカーディガンの裾^{すそ}を伸ばして掴む様にしながら歩を進める世良羅は注目されて恥ずかしいのだろうか、肩を竦めており耳は赤くなっている。

「み、み、見てんじやないわよ！」

恥ずかしさに堪りかねたのか顔まで赤らめて怒声を発する世良羅。

周囲の空気が帶電した様にパチパチで火花を散らせた。

「遅れてきておいて見るなじやないだろうが、このクソビッチ。さつさと列に並べ。」

ただでさえ目立つ容姿をしているのに、あの性格では翔をぶち抜いて学年一の有名人になる日もそう遠くはないだろうと俺は嘲笑の笑

みを浮かべた。

さすがの世良羅も静琉に叱責されて、大人しく列へと並んだ。顔は相変わらずの不機嫌面だったが、元々ああいう顔なのだろうと思えばいい加減気にならない。

「「ごほ」」ほつ……私、学年主任の駿河志智郎と申します。昨日からの入学式等色々お疲れさまでした。『ごほつぐほつ……。』

世良羅に集まつた視線を遮るかのように、咳き込みながらも丁寧な言葉で喋る志智郎は少なくとも静琉や世良羅よりも随分とまともに見えた。

ただし顔色はすこじぶる悪い。

「失礼します。」とがらがら声を発し、後ろを向いてさらに激しく大きく咳き込む姿は、あんまりまともではなさそうだと一瞬で俺の考え方を改めさせる。

「失礼しました。私、あまり身体が丈夫ではないもので……。話を続けます。貴方達はこれから最上級師を口指してこの学び舎で励むわけですが……『ごほ』」ほつ。』

「…………とその前に一度死んで頂きましょうか。」

長い前髪の隙間から除く眼鏡の奥で妖しく輝く眼光。

志智郎の言葉の意味を飲み込む前に視界が一瞬で漆黒の闇に包まれた直後、足元が崩れ去るような感覚に襲われた。

内臓が持ち上げられる様なジエットコースターに乗ると起きる落下時特有の身体的異常を感じたが、地に足はついているし、着地したような衝撃も感じない。

恐る恐る目を開けると、つい先程までの体育館はすでになく、二つごつとした筋肉の洞窟と思われる風景が眼前に広がっていた。

暗がりといえば暗がりだが、一寸先が見えないほどの闇ではないし、暗闇に少しずつ目がなってきた事もあり周囲の状況が把握できるくらいにはなった。

肩がぶつかる位の距離にいた見知らぬ生徒も、目の前に立っていたはずの翔もない。

(また飛ばされちまつたのか？ 翔はどうして…)

「空間形成とはやつてくれるわ。」

聞き覚えのある女の声。

「 にしても、一体なんのつもりかしら。」

できれば今後関わりあいにはなりたくないが、さすがにこの状況では無視する事はできない。

「 千早さん。これは一体？」

出っ張った顎に腰を降ろした世良羅は何が気に入らないのか、言葉を発した俺を容赦なく睨み付けた。

けれど魔法の事もこの世界の事も殆ど理解していない俺が今頼れるのは、このツンツン美少女だけだ。

勇気を振り絞り、無下にされる事は覚悟の上で再び声を振り絞る。

「 千早さん。これは

「 空間形成術よ。君はそんな事も知らないの？」

予想外だ。

もう2、3度無視される事を覚悟していた俺にはこの上なく嬉しい

誤算である。

「俺、あんまり魔法に詳しくなくて……」

「いぶか
訊しげに、言葉を発することもなく俺を見返す世良羅の熱烈な視線

に耐えかねて眼球が泳ぐ。

「まあいいわ。最上級師が数人がかりならこの規模の空間形成術が練成出来ても不思議ではないしね。」

「いや、だから、空間形成術って？」

「空間形成術って言うのは、こんな風に何もないところに空間を作り出す術式の事。具現化系練成の最上位術式よ。」

「そんな事までできるんだな。すげえもんだ。」

「君、そんなに呑気に構えてて良いの？ 閉じ込める事が目的とは考えにくいし、必ず何か仕掛けてくるわよ。」

「仕掛けるって何を？ 急にそんな事を言われても……。」

腰かけたながら不満気に頬杖ほおづえをつく世良羅は余裕がある様に思えたが、首を動かさずに周囲を見渡し何かを警戒している事に分かり、そうではないのだと気付いた。

世良羅の隣にある岩に腰掛た俺は暗がりの中での沈黙を恐れ、会話を続けようとする。

「でも、学生とはいえ教師なんだから危険な事はしないだろ？」

「君、魔立の学校を舐めてない？ 君は天才の弟君とは違うんじよ？ それなのになんでそんなに余裕ぶつっているわけ？」

「そんなつもりはねえよ。余裕なんて、あつたことないわ……弟が優秀すぎるとな。」

「別に君が死のうが半身不随になつても私は構わないけど、警戒した方がいいのは間違いないわ。魔立の学校では授業中に怪我人が出るなんてざらだし、死人だつて

言いかけて世良羅は顔を顰しかめて言葉を絶つた。

俺は聞き逃さなかつた。

今、確かに死人が出る事もあると言おつとした。

魔法が存在する位にファンタジーな世界なのだから多少危険な事も

あるのかもしないとは思つていたが、学校の授業で死人が出るなんてのは俺の常識の外だ。

更に言えば、死人なんてサスペンスドラマでしか見た事のない現代っ子の俺からすれば、その告白は膝が笑うほどに驚き、恐れられる事だ。

言葉を発すれば、声が震えてしまいそうで、沈黙に耐えることを選んだ俺は口に手を当て、世良羅の様に頬杖をつく格好動搖を悟られまいと固まった。

しばしの沈黙の後、世良羅が急に俺に覆い被さるよつになり、当てていた手ごと俺の口を塞いだ。

密着し、その場に倒れる様に岩肌に背中を打ち付けるが、世良羅の柔かな感触とシャンプーの臭いだろうか、柑橘系の甘い香りに全身件は研ぎ澄まされ痛みなど感じない。

股の間に柔かな太ももを射し込まれ、胸部に確かに感じる柔かな膨らみ。

（何だ？ 何故押し倒された？ 嫌われてはいないにしても、好かれている雰囲気などまるでなかつた。いやむしろ高確率で嫌われているだろう。なのに何故？ はつ！ まさかあれか？ 異世界に飛ばされた男は次から次に現れる大勢の女の子達に思いを寄せられハーレム状態になると言うあれなのか？ 翔にはあり得ても自分にはあり得ないと思っていたが……、それでは遠慮なく。）

「 静かにしてよ。」

生まれて初めての状態にうつかりトリップしてしまった俺は思いの外、息遣いが荒くなつてしまつていた様で、小声で叱責する世良羅のひんやりと冷たい掌に口を塞がれた。

その冷たさに冷静を取り戻せた俺は、自分と世良羅以外の者の気配を感じた。

獣臭い臭気が鼻を突き、荒い息遣いが耳に障る。

それは見るまでもなく、直感的に人とは異なる者を連想させた。

覆いかぶさる様な格好のままで俺の口を塞ぐ世良羅が耳元で囁き、吐息に首筋がくすぐられる。

「 やるしかないわ。援護しなさい。」

そう呟いた世良羅は急に俺の上から飛び上がり、首だけを少し浮かせていた俺はその反動で頭を地面に打ち付けた。

ぶつけた頭を擦りながら視線を上げると、見た事もない化け物が俺達の前に仁王立ちしている。

童話に出てくる狼男に似た姿。

しかし目の前のリアルなそれは今まで見たどんな物語の挿絵なんかよりも醜悪で恐ろしい姿をしていた。

「 神々の畏れたる雷鳴よ、我が猛る怒りをその神槍に宿し 」

聞き覚えのある文言。

ほの暗い洞窟うつそくが蠟燭ろうそくの様に微弱な光を纏い始めた世良羅に照らせ明るくなる。

帶電している様な世良羅の身体からは稻妻ほじまつが迸り始め、それを見ていた化け物は低く唸り声を上げて身構えた。

よく見れば、世良羅の指にはMRDが装着されており、指に光る紫紺の玉からは浮き出るようにしてキー・ボードに似た形状の物が具現化しており、世良羅はそのキーを懸命に叩いている。

「 【雷槍】よ我が敵を穿て！」

その言葉を発すると共に激しい閃光が世良羅の指先から迸り、化け物の胸部を貫いた。

人差し指を突き出した世良羅の指先からは一筋の煙が立ち昇つている。

化け物は短い悲鳴を上げてその場に突つ伏した。

「 やつたのか？」

「 次弾装填。術式名、雷槍再起動。思念化情報再構築 」

俺の問いに応える事もせず、再びMRDからキー・ボードを出し、忙せわ

しなくキーを叩き始める。

キーボードは半分透き通っていて、そこに存在しているのかもあやふやで3D映像の様だ。

MRDと同じく紫色の光をほんやりと放つており、その光が世良羅の鼻筋の通った美しい顔を照らす。

「何をぼさつとしているの？ 次が来るわ！ 早く援護しなさいよ！」

世良羅の言葉通り、次は三匹も先程と同じ化け物が現れた。けれど俺には魔法は使えない。

使い方がさっぱりわからない。

「ど、どうすりやあいいんだよ？」

もはや魔法について無知な事を隠しておける状況ではなかつた。後先考える前にこの状況を乗り切らなければ、「後」そのものが存在しなくなつてしまつ。

「君、本気で言つていいの？ MRDを持つていてのに何の魔法練成もできないって事？」

「その通りだよ！ サッサと教えてくれ！」

化け物達はすぐに飛び掛つてくる様子はなく、俺達を囲む様にして移動する。

化け物の口から零れる涎よだれが危機感を搔き立てる。

「信じられない！ 信じられないわよ、君！ とにかくMRDを起動させなさい！」

「それすらわかんねえんだよ…」

「わけがわからないわ！ 記憶喪失なの？ それとも果てしない馬鹿なの？」

「んな事、今はどうでもいいだろつ… 早く起動のさせ方を…」

「触れて起動コードを唱えればいいだけよ！ ほら、早くしなさい！ まさかそれすらわからないとは言わないでしょつね？」

「わかんねえよ… そんな…」

そこまで言葉を発したところで、頭に言葉が浮かび上がってきた。

空虚の脳裏に浮かんだ言葉。

化け物達が必殺のポジションを取り終えたのか、身を低くして臨戦体勢を取る。

「起動コードが本当にわからな

「虚構よりも眞の現実を！」

頭に浮かんだ言葉を口すると腕のMRDが眩い光を放ち、キーボードが浮かび上がった。

「知っているんじゃない！ こんな時にふざけないで！ 早く憑代^{よじしろ}をこちらに向けて！」

俺が腕を差し出す前に世良羅が乱暴に憑代と呼んだキーボード状のそれを引き寄せいじくり始める。

憑代の操作に集中し、自然と身体が近くなり何度か感じた柔らかさを肘の辺りに感じた。

が、そんな事を考えている時ではないので感触だけを記憶の奥に大事にしまい込んでおこうと世良羅に感付かれない様に小さく左右に首を振った。

「 思念化をオートに設定。 A T モードで憑代を再起動。 オートマチック」

わけの分からない事を呟きながら憑代をいじくり回していた世良羅が離れると俺の憑代は光を失つて消滅してしまった。

「おい！ 消えちまつたぞ！ どうすんだ！」

「つるさいわね！ 今再起動中だから、立ち上がつたら

さすがに待ち切れなかつたのか、化け物が毛むくじらの腕を振り上げて一斉に襲い掛かってきた。

「序歌を省略！ 雷槍よ、我が敵を穿て！」

世良羅の指先から再び閃光が迸り、至近距離の化け物を撃ち抜いた。けれど先程の化け物よりも頑丈なのか、苦しそうに唸り声を上げ膝をついたものの、すぐさまゆらりと立ち上がる。

世良羅は口角を少し上げて小さな舌打ちをした。

「おい！ あまり効いてないみたいだぞ！」

「しょうがないじゃない！ 序歌を破棄したんだから！」

そう言わ�てみれば、先程の閃光よりもかなり光が弱かつた気がする。

恐らく序歌とは呪文の事で、それを詠まないと魔法は本来の力を發揮する事ができないのだろう。

そういうしている間にキューンとディスクの回るような音と共にMRDが光を放ち、キーボードだけだつた憑代と呼ばれるそれにモニターが追加された形になつて再び現れた。

「何でもいいから、術式を立ち上げて！ 思念化はオート化してあるからイメージする必要はないわ！ ATモードだから流動化と集中化もオートでやつてくれる！ 序歌は憑代のモニターに表示されるものをそのまま詠み上げて！」

指先から、か細い電流を発し、化け物に抵抗しながら早口で捲くし立てられ、言われるがままにモニターに表示されている【術式フォルダ】なるものを開いて、一番上のファイルを選択した。

「えーっと……」

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ……【憤怒の右腕】よー わ、我が敵を打ち砕け！」

脳が泡立ち、血液が沸騰し逆流する様な感覚。

身体が熱を持ったように熱くなり、その熱が右腕へと集中していく。嗚咽おえつが鳴りそうな程に気分が悪い。

気分の悪さが増していく事に同調するように右腕が光り輝き、徐々に巨大化していく。

「お、おい！ これ本当に大丈夫なのか？ すぐ気分が悪いぞ。」

「大丈夫、体調が優れないのはATモードの憑代によつて君の魔力が無理矢理に操作されている反動だから心配ないわ！」

「そういう、事は、先に説明し、ぐう！」

右腕に締め付けられるような激痛が奔る。

いつそ右腕を切り落としてしまいたいほどの痛みに唸りながら、朝の教室で静琉が教鞭を振りながら語っていた言葉を思い出した。（魔法は決して簡単じゃないってわけね。楽しょっとするとこういう風になるわけだ。）

思念化、流動化、集中化。

そのすべてをオートでやろうとすると強引に脳内にイメージを作られる反動で脳が激しく揺れ、泡立つ様な感覚に襲われる。

流動化で全身の血液が逆流するような感覚に陥るのは血液が移動しているのではなく、魔力を意思とは関係なく操作されている証拠だろう。

そして、腕がこんなにも痛いのは恐らく集中化の影響なのだろう。魔力を帯び右腕の光はその照度を強め、帯魔化された状態の腕は徐々にそのサイズは大きくなり、形状までもを変えていき、痛みが徐々に増していく。

まるで腕が引き伸ばされるような感覚とそれに伴う激痛に瞳が湿る。光が弾ける様に迸り、あまりの眩さに目が眩んだ。

「……なに、それ？」

世良羅の動搖を含んだ声が耳に届き、視力を取り戻し始めた眼で痛みの治まった腕に視線を落とす。

俺の右腕は先程までは大きく異なる姿へと変貌していた。地面に付くほどに巨大化し人間の皮膚ではなく、金属の様な土の様な不思議な素材で構築された腕。

驚きというよりも恐怖に近い感情に頭が真っ白になる。

唯一脳裏に浮かぶのは、この世界に飛ばされる直前に翔と見た巨大な人型の建造物。

あの建造物を構築していた素材にそっくりな自分の腕がさらに気味が悪く、恐怖心を駆り立てる。

「なんだつづーんだよ……。」

驚きに立ち竦んでいると世良羅の悲鳴が聞こえ、腕に落としていた視線を慌てて前へと向けた。

一匹の化け物に世良羅は両腕を拘束される様な形になつていて、少し離れた場所にいた残りの一匹の化け物がそこに歩み寄る。

普段は勝気な表情を崩さない世良羅の顔が恐怖に歪んでいる。

離れていた場所にいる化け物が世良羅に危害を加えようと近づいているのは一目瞭然の光景だ。

涙を溜めた視線をゆっくりと俺の方に向ける世良羅が助けを求めているのは鈍感な俺でも瞬間に悟ることができた。

正義感とは違うし、恋愛感情なんてものでも当然ないが、絶対に助けなければならないと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941y/>

ゴーレムマイスター

2011年12月1日23時47分発行